

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370065

研究課題名(和文)ゲオルク・ジンメル宗教論の時代文脈的研究

研究課題名(英文)Georg Simmel's Theory of Religion and its Historical Context

研究代表者

深澤 英隆 (Fukasawa, Hidetaka)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：30208912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀末より20世紀にかけて極めてユニークな光芒をはなした思想家・社会学者であるゲオルク・ジンメル(1858-1918)の宗教論に焦点をあて、これまで顧みられることの少なかったその宗教理解の特質の解明をめざしてなされた。その際、とりわけ同時代ドイツの、とりわけ都市部における宗教状況という文脈におけるジンメル宗教論の特異性およびその現代的意義を明らかにすることを試みた。ジンメルの宗教論は、近代宗教哲学の痕跡を残しつつ、それを社会的相互行為論と結びつけることにより、宗教社会学の先駆けとなり、また生の哲学の導入によって、同時代の「流浪する宗教性」にひとつの方向づけを与える試みであった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate the thought of Georg Simmel with respect to religion and the religious situation of his day. As a unique philosopher and sociologist of the early 20th century in Germany, Simmel produced many texts about religion. In spite of their originality and historical importance, however, they are far less well-known and researched than his works of other fields. The present research project aimed to clarify the specificity of Simmel's theory of religion in the context of Germany's contemporary religious conditions, particularly in the metropolitan milieu. Simmel's theory of religion still carries the traces of the philosophical understanding of religion in the 19th century. Yet by connecting them with the idea of social interaction, he provided the first theoretical foundations for a sociology of religion. Furthermore, his later idea of "religion of life" broke radically the framework of the Neo-Kantian philosophy of religion of his day.

研究分野：宗教学

キーワード：ゲオルク・ジンメル ドイツ近代宗教史 宗教社会学 宗教哲学 都市と宗教

1. 研究開始当初の背景

社会学・哲学から文化論に至る幅の広い領域でユニークな足跡を残したゲオルク・ジンメルの仕事が、極めて先駆的な知見を多く含んでおり、100年後の後期近代社会をすでに予見するものであったことは、よく知られている。この意味で、とりわけ1980年代頃より今日に至るまで、ジンメルの再評価が進み、膨大な研究文献が蓄積されてきた。ところがこれまでその宗教論については、十分な解明がなされてきたとはおよそ言いがたかった。ジンメルの業績において、宗教論の占める位置は、決して小さなものではない。それにもかかわらず、そもそもジンメルの宗教論を主題としたモノグラフそのものがごくわずかしかない。国外ではジンメルの死後以来今に至るまで、わずか6点ほどを数えるのみであり、日本においてはこの主題についての研究書はなく、関連論文もごくわずかである。

これまで研究代表者は、ジンメルの宗教理論に内在する一連の論考を公にしてきたが、ジンメルの宗教論の幅広い主題領域と多方法的な論述を総合的に考察するには至っていなかった。またジンメルの宗教論は、時代診断的な色彩も濃く、同時代の宗教状況という文脈に強く規定されていることを痛感した。この意味からも、ジンメルの宗教論を十分に解明するためには、内在的読解をより徹底的に行うとともに、ドイツ近代宗教史という文脈の中にジンメルを位置づける試みが不可避と考えられた。

2. 研究の目的

上記のような状況認識の上に立ち、本研究は以下のふたつの研究目的をかかげた。

(1)まず近代ドイツ宗教史および宗教思想史の文脈を検討し、ジンメルの宗教思想・宗教理論につらなる系譜をたどり、ジンメルの宗教理解の淵源を探る。また同時代ドイツの宗教状況を逐一検討し、ジンメルの宗教理解の時代診断的・時代介入的側面がどのような時代的文脈のもとに形成されたかを解明する。

(2)こうした時代地平の理解にもとづき、あらためてジンメルの宗教論の全体像を解明する。とりわけ、哲学、社会学、心理学、美学などの多岐にわたる宗教の視座がどのように関係し合い、ジンメルの宗教理解を構成するに至ったかを明らかにする。またこの作業に合わせて、ジンメルの宗教関係の全論考を訳出する。

3. 研究の方法

上記(1)については、通常思想史・文化史的方法を基本としたが、ジンメルの活動の舞台となった当時のベルリンの社会・宗教状況に関わる資料などを、ベルリン国立図書館などで収集し、時代資料をも考察の対象とした。

(2)については、ジンメルの宗教論に関わる全論考を訳出するとともに、ジンメルの多面

的な宗教理解を総合的に解釈するため、論考間の論理の整合性や、概念使用の対比などに留意しつつ、入念な読解を行うべく努めた。

4. 研究成果

上記(1)の研究目標については、以下のような成果を得た。

1)まず読解を進めるうちに、ジンメルの宗教論がある意味で近代ドイツ宗教史・宗教思想史のひとつの帰結であるとの感を強くした。ドイツ近代を特徴づけるものは、何よりも新旧両教の信仰分裂であったが、カトリック層が社会的上昇を抑えられる一方で、活発な下位文化として多彩なネットワーク組織を築き、相対的に信仰を保っていたのに対し、プロテスタント層は近代社会建設の担い手として、近代社会に適應し、世俗化を推し進めた。そのいわば代償形成として、プロテスタント知識層による歴史上稀に見る哲学・思想、そして宗教の自己理解としての神学の展開期が訪れた。ジンメル自身も離脱以前はプロテスタンティズム教会に属しており、まずはこのプロテスタンティズムの思想系譜に属していたと言える。

その際のジンメルの特徴をなしていたのは、第一に、プロテスタンティズムのもっていた反省的エトスを、キリスト教の自己解体の域にまで推し進めたそのラディカルさであった。同時代の宗教哲学がなおキリスト教の真理性を担保することが一般的であったのに対し、ジンメルは慎重にことばを選びながらではあるが、實在論的信仰としてのキリスト教の真理性を否定した。ジンメルは強くカントの影響を受けており、宗教的対象認識の成立についても、カント的な主観的構成論を下敷きとした図式で理解している。ただし、カントがキリスト教倫理の普遍妥当性を確保しようとしたのに対し、ジンメルはいかなる留保もなくそうした論証を退ける。また神性の観念の成立については、フォイエルバッハの延長上に、明瞭な投影論的観点に立っている。

このように見ると、ジンメルは宗教批判や無神論の陣営に近く、プロテスタンティズムのエトスとは切り離されているかに見えるが、ここでジンメル宗教論の第二の特徴として指摘できるのが、そのいわば救済論的志向性である。とりわけベルクソン哲学を知った1908年以降は、生の哲学の色彩が濃厚となるとともに、いわばこの生の内在的超越性の運動のうちに、形而上学的なものを看取する可能性を見出し、またその生に宗教的投影を回収し、生そのものの自己享受を達成することに、ある種の救済論的な待望の実現を見ている。もちろんここでは、超越と救済への待望は、いかなる意味でもキリスト教的内容を持つものではなく、いわば救済論的形式そのものが、これも無規定的な生を志向することとなる。

2)以上のようなジンメルの思想的特徴は

また、当時のドイツの、とりわけベルリン等の大都市における宗教性のあり方とも対応しており、この意味でジンメルの宗教論は強く同時代の社会・文化的文脈に規定されている。歴史家のT・ニッパラダイは、この時期のドイツの宗教状況を精査するなかで、プロテスタント教養層・知的中間層が既存の教会キリスト教の提供する宗教的救済論に満たされぬ気持ちを抱き、精神的にさまよう様を「流浪する宗教性」の概念で呼んだ。本研究では、こうした宗教性のあり方と結びついた宗教運動の資料を数多く入手し、分析した。ベルリンを準拠点に社会と文化の考察をしたジンメルは、まさにこうした状況のただなかにあったが、その際、ジンメルの状況との関わり方は二重の性格をもっていた。すなわち、一方でジンメルは冷徹な時代診断者として、こうした宗教状況を社会学・文化学的に分析する。他方で、ジンメルは時代状況に介入するある種の哲学的救済の告知者でもある。すなわちジンメルは、ある論考ではこうした流浪する宗教性を歴史的背景をもふまえて距離をもって論じ、そこで形成されるさまざまな宗教運動についても、一定の共感のようなものを語る。しかし他方では、そうした同時代の宗教形成を一種の「コケットリー」と断じつつ、それに対置するように、自らの「生の宗教」とでも呼ぶべき宗教的ヴィジョンを提示するのである。このように、その宗教理解が幾重にも時代の社会と思想の地平に規定されていること、またそれらとの関わりが経験的でもあり規範的でもある点に、ジンメルの宗教論の特殊性がうかがわれる。

上記(2)の研究課題については、以下のような成果を得るに至った。

1)まずジンメル宗教論の多彩な主題および方法論の選択について、その変遷をおさえるとともに、ジンメルの他分野の著作・論考と対照しつつ、ジンメルの宗教論の展開をあとづけた。それによると、実証主義やプラグマティズムの色濃い著作期から社会学に関心が移る世紀転換期ごろより、宗教社会学の業績があらわれ、また後年の生の哲学への関心の移動期には、やはり生の哲学の要素の色濃い論述がなされていることが分かる。また芸術論に集中的に取り組んでいる時期には、やはり宗教芸術論が複数執筆されている。このように一連のジンメルの宗教論は、ジンメルの学的関心の推移とほぼ並行するかたちで変化していることが明らかとなった。しかしその一方で、社会学、心理学、文化学、哲学などの方法論については、必ずしもこの年代推移と並行して変化するわけではなく、いずれの著作期においても、複合的な方法論で宗教への取り組みがなされていることも確認された。

2)さらに、ジンメルの多彩な宗教論のすべてに通底する基礎概念を探ることにより、ジ

ンメルの宗教論全体の統合的解釈を試みた。

まず宗教/宗教性という二分法が、ジンメルの宗教論の全体を貫く鍵であることが再確認された。「宗教性」の概念は18世紀以来のものであるが、ジンメルにおいては実定的宗教や宗教的行為の根底にある主観的・内面的な傾向性を表す。この概念はまた、新カント派とはまたことなる仕方で、宗教的ア prioriと結びつけられているほか、社会的相互行為の根底にもあるものとされ、宗教社会学にとっての基礎概念にもなっている。また生の哲学への移行後は、生の自己超越的な精髓として、宗教性が再把握されることになる。いずれにせよジンメルにとっては、教会の衰微を見届けながら、なお宗教の主観的・文化的ポテンシャルの確保を可能にする、経験的であるとともに規範的な概念であった。

さらに生/形式の二分法も、ジンメルの宗教論のもっとも基礎的な概念ペアであった。前期における内容/形式のペアを受け、それを生の哲学によって発展的に再把握したこの対概念により、ジンメルは無規定的で自己超越的な生(=宗教性)が、自己を客観的精神としての形ある宗教に客体化しながら、それをふたたび生により克服することによって宗教史を更新していくという動的図式を完成させた。

3)全論考を通じて散見される未来の、ありうべき宗教をめぐるジンメルの議論を比較検討した。その根底となっているのは、やはり生と形式の二分法であるが、そのヴィジョンには三通りの語られ方があることが確認された。すなわち、第一にはすべての形式的な投影が生へと回収され、生そのものを形而上学的なものとして了得することに、宗教性のもっとも完全な自己実現が見出されるとのヴィジョンであり、第二には、生と形式の生成運動のなかでつねに形式が克服されていかざるをえないが、まさにこの克服の終わりなき運動のなかにこそ聖性は宿るとするヴィジョンである。これに対し最晩年には、生の自己実現は結局形式を必要とし、それがしばしば生との齟齬をきたすという「悲劇」に終わるにしても、形式は不可避であるとするこはも見られる。こうした立場の未決定性は、「距離化」と「近接」というジンメル固有のパースペクティブのままに、生の形象への経験的距離化と生そのものへの規範的近接というジンメルの思想全体をつらぬく両義性のあらわれでもあると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

深澤英隆、哲学的宗教言語の帰趨、
哲学、通巻68号、2017、65-80

深澤英隆「脱宗教」時代の「宗教」 シ
ュライアマハーおよびジンメルの時代診断、

宗教哲学研究、通巻 32 号、2015、1-16

深澤英隆、宗教経験論と脱文脈化：シュライアマハー『宗教について』をめぐって、一橋社会科学、通巻 7(別冊)号、2015、97-214

〔学会発表〕(計 3 件)

深澤英隆、哲学的宗教言説の帰趨—概要と補遺—、日本哲学会、2017.5.21、一橋大学(東京都・国立市)(招待講演)

深澤英隆、近現代における宗教言説の展開—宗教のポリティックスとポエティックス再考、近代啓蒙脈絡中的思想論争」研討會、2015.11.27、中央研究院中國文哲研究所(台湾・台北市)(招待講演)

Hidetaka FUKASAWA, Georg Simmel and the Paradoxes of the “Intellektuellenreligion”, XXIth International Association for the History of Religion World Congress, 2015.8.24, University of Erfurt(ドイツ・チューリンゲン州)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

深澤 英隆 (FUKASAWA, Hidetaka)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：3 0 2 0 8 9 1 2